

創立百周年記念論文集 下巻

九州大学文学部紀要・叢書・図書委員会

<https://hdl.handle.net/2324/7358024>

出版情報：2025-03-31. School of Letters, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

古墳時代後期における 大型横穴式石室の築造工程

— 八女市・乗場古墳と童男山1号墳の比較から —

辻 田 淳一郎

1. はじめに

古墳時代後期の横穴式石室については、従来、時間的変遷や階層性、築造技術・系譜といった問題が議論されてきた。また近年では、三次元計測による記録と分析も活発に行われている。筆者自身も、これまで北部九州の横穴式石室について、階層性や技術系譜、基準尺度といった観点から検討を行ってきた。本稿では、福岡県南部に所在する八女古墳群の乗場古墳・童男山1号墳を具体的な対象として、築造工程と構築技術に関する検討を行いたい。この両古墳は、いずれも大型の複室構造横穴式石室を持ち、6世紀後半～末頃に築造されたと想定されることから、八女古墳群の終焉を考える上でも注目されてきた。後述するように、この両石室の時間的前後関係や系譜関係についてはいくつかの見解があるが、本稿では三次元計測にもとづく観察を通して、両者の年代や系譜関係について考えてみたい。

2. 研究史と問題の所在

(1) 北部九州の後期横穴式石室研究の概観

列島全体でみた場合、九州の横穴式石室は、出現が早く、また形態・技術的にも独自性をもちながら後期・終末期まで存続する点が特徴として挙げられる。こうした中でも、北部九州は列島で最も早く横穴式石室が出現した地域として

検討が行われてきた。北部九州の横穴式石室全般に関する研究史は、重藤輝行氏（1999・2020）・杉井健氏（2009）・藏富士寛氏（2009・2020）・下原幸裕氏（2020）らの研究に詳しいのでそちらに譲り、ここでは本稿に関わる後期の石室に関する論点について整理しておきたい。

まず後期の横穴式石室に関する研究の基本的な方向性は、分類・編年と階層性、系譜の整理という点である。具体的には小田富士雄氏（1968）や柳沢一男氏（1975）の研究をはじめとして、山崎信二氏（1985・2003）、柳沢一男氏（1990）、重藤輝行氏（1999・2020）・田村悟氏（1999・2009）らの研究などにおいて、後期にみられる北部九州系・中九州系・近畿系の系譜差と時間的な変遷について概ね共通理解が形成されている。北部九州では、6世紀中葉のTK10型式前後から複室構造の石室が普及し、それ以降使用石材も含めて石室規模が大型化する。その中で、複室構造の系譜が有明海沿岸地域に求められること（柳沢2003）、また複室と単室の違いが地域ごとに異なるあり方として階層差としても現れることが整理されてきている（重藤2020）。

このうち、技術系譜については、藏富士寛氏により複室構造石室の前室・羨道部の平面形および天井部形態により大きく「西北九州系」・「筑前系」・「筑後・北肥後系」に区分できることが指摘されている（藏富士2009・2020）。また小嶋篤氏の一連の研究により、石室の平面形態・墓壙との関係・玄室天井部形態などの属性の組み合わせから小地域ごとに石室構築技術にまとまりがみられることが示されている。氏はこれを「古墳築造範型」と呼称し、「古墳をつくる際の集団行動方式」と捉えて地域集団との結びつきという観点から説明している（例：小嶋2020・2023・2024a・b）。

こうした研究の中で、重藤氏や藏富士氏、小嶋氏らの研究に示されるように、時間的変遷と系譜差・階層差が属性ごとに複雑に交錯している状況について、地域ごとに如何に整理するかが論点となっている。

（2）八女古墳群における後期の横穴式石室の変遷について

上述のような研究の中で、本稿が対象とする八女古墳群を含む福岡県南部地

域は、大型石室が多く築造され、また磐井の乱後の筑紫君一族の展開を考える上でも注目されてきた。

本稿で対象とするのは、八女市乗場古墳と童男山1号墳の横穴式石室である(図1・2)。乗場古墳は、全長約90m前後と想定される前方後円墳で、岩戸山古墳の築造後に造営された、八女古墳群の最後の前方後円墳の一つである。詳細は後述するが、全長約10mの複室構造の横穴式石室を有し、連続三角文などの彩色壁画を伴う装飾古墳としても著名である。これに対し、童男山1号墳は、八女丘陵の東部に位置する童男山古墳群のうちの1基であり、径約48mとされる大型円墳である。石室は羨道部分が大きく破壊されているが、全長約18mの複室構造の横穴式石室と想定されている。玄室には石屋形と刳拔式石棺が安置されている(図4上)。

八女古墳群では、筑紫君磐井の墳墓と想定される岩戸山古墳の主体部が未調査のため、6世紀前葉時点の地域最上位墓の横穴式石室の様相が不明であるが、周辺の古墳の調査により、6世紀における石室の変遷が想定されてきた。このうち乗場古墳および童男山1号墳の石室は早くに小田富士雄氏らにより調査が行われ、出土遺物と石室の構築技術から乗場古墳は6世紀中頃から後半、童男山1号墳は6世紀末頃と想定されている(小田・真野1971・1972)。小田氏らは、乗場古墳の石室において、石材が軸を違えながら積み上げる「煉瓦積み」を基本とするのに対し、童男山1号墳の石室では石材が軸を揃えながら積み上げる「重箱積み」がみられる点から、童男山1号墳の石室を乗場古墳に後出するものとして位置づけている(小田・真野1971)。童男山1号墳を含む童男山古墳群は、岩戸山古墳や乗場古墳が単独で築造された「吉田小群」から東に4kmほど離れた位置で築造されており、年代観も含めて乗場古墳や善蔵塚古墳などの前方後円墳とどのような関係にあるのかについていくつかの意見がある。柳沢一男氏は、7世紀前半に構築されたとみられる岩戸山4号墳(下茶屋古墳・径約30mの円墳)が「吉田小群」の中で岩戸山古墳や乗場古墳に後続して築かれた地域最上位墓と位置づけている(柳沢2014:図3上)。7世紀前半の最上位墓を岩戸山4号墳と位置づける点は多くの研究者の間で一致しているが、童男

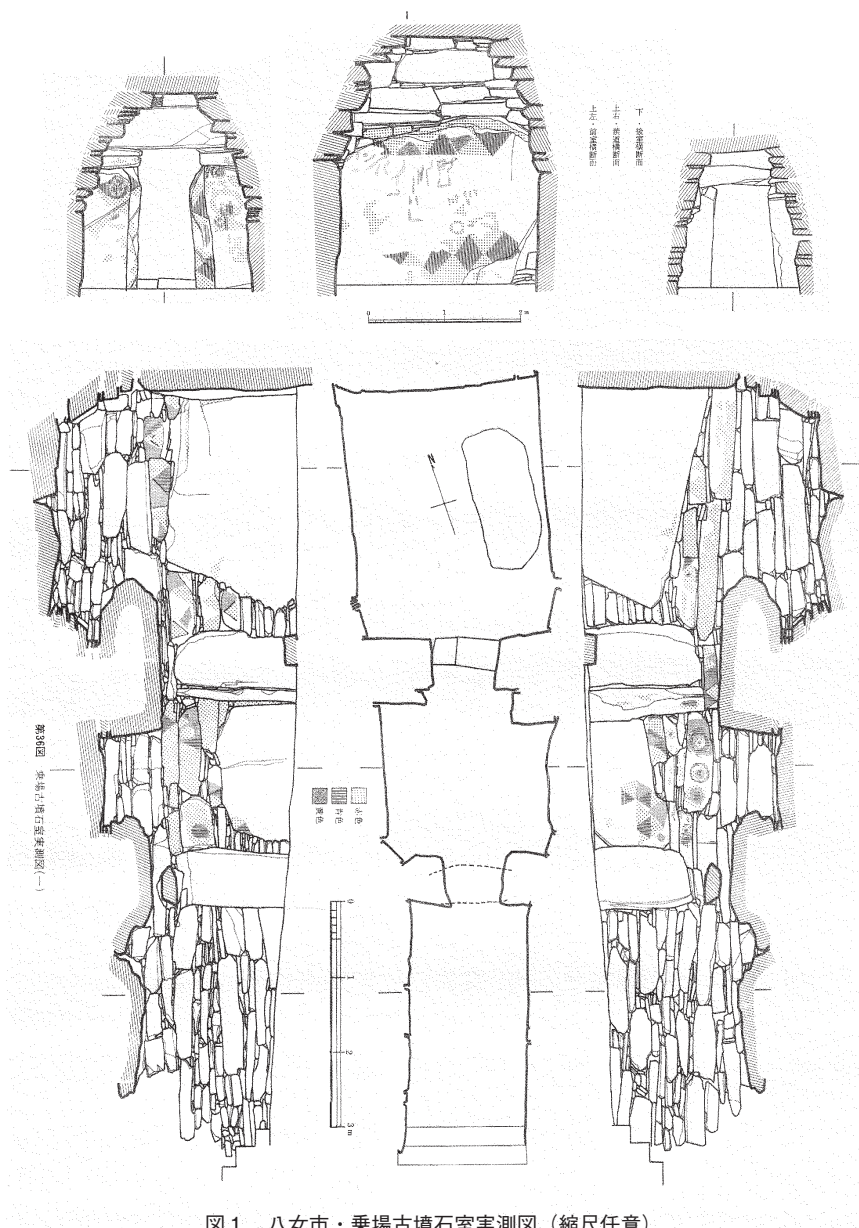


図1 八女市・乗場古墳石室実測図 (縮尺任意)

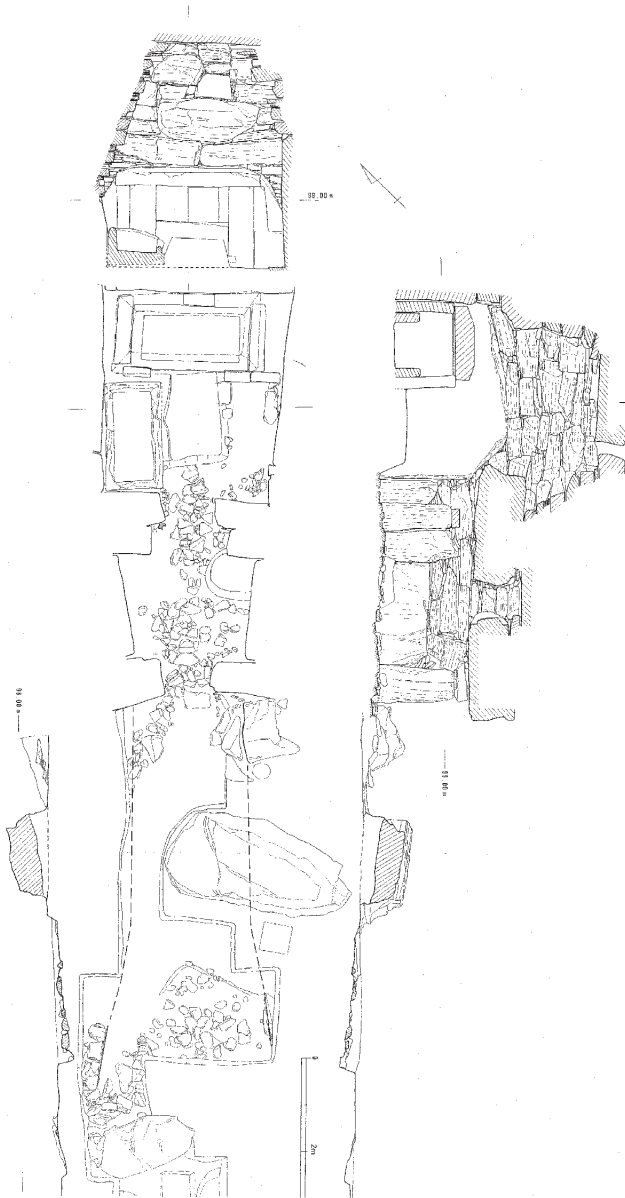


図2 八女市・童男山1号噴石室実測図（縮尺任意）
※破線は筆者による追記

山1号墳については年代観も含め評価が定まっていないのが現状である。従来の年代観では、6世紀後半で乗場古墳と同時期かやや後出とする理解が一般的であるが（例：山崎1985；柳沢1990；小嶋2020）その場合も、「吉田小群」との関係をもどのように捉えるかも含め、八女古墳群全体の変遷をもどのように理解するかという点が課題といえる。この問題について、大塚恵治氏は、2015年に刊行された岩戸山歴史文化交流館の常設展示図録（図3下）において、岩戸山古墳以来の「吉田小群」とその周辺において大型前方後円墳の築造が停止した後、童男山支群の同1号墳へと「首長墓」が移動し、7世紀前半には「吉田小群」において岩戸山4号墳が築造される、という変遷観を示している（八女市教育委員会編2015；大塚・岸本2009）。あわせて童男山1号墳の石屋形などの菊池川流域（熊本県北部）にみられる諸要素から、「筑紫君一族」と「火君」との関係の中で説明を行っている。大塚氏の理解は、八女古墳群全体の中で童男山1号墳の位置づけを考える上でも検証する必要があるだろう。また小嶋篤氏は、乗場古墳を「八女型」と位置づけつつ、童男山1号墳が氏のいう「八女型」を基本としながら、「筑後型」と「肥後型」の要素が複合されたものと論じている（小嶋2020）。他方で、童男山古墳群では玄室天井が垂直に高く積み上げられるものが多く、これらは和歌山県の岩橋千塚古墳群にみられる「岩橋型」の影響を受けており、在地の石室系譜とは異なる石室が並存すると指摘している（小嶋2024a・b）。童男山古墳群については、こうした築造系譜や全体の変遷も含めた検討が今後の課題といえよう。

この童男山1号墳の石室については、田村悟氏が、6世紀後葉に北部九州において広く拡散する基本型式の典型例として位置づけ、「童男山タイプ」と命名している（田村1999）。童男山1号墳の石室が広域に共有された基本型式とみてよいのか、また実際の共有のあり方についても検討が必要であるが、北部九州で広く類似した形態の石室が築造されている点は注目される。

(3) 石室の窓状施設と二重玄門構造について

この他、乗場古墳と童男山1号墳の石室には、いくつかの共通した特徴が認

められる。具体的にこれまでも注目されているのが、「窓状施設」と「二重玄門構造」である（図4下）。前者の窓状施設は、乗場古墳では前室の前門袖石上部に、童男山1号墳では玄室の玄門袖石上部に設置されている。後者の二重玄門構造は玄門部の前面に玄門袖石（立柱石）とは別にもう一つずつ石材が立てられているものである。両者ともに小田富士雄氏らにより乗場古墳・童男山1号墳の石室の共通した特徴として指摘されている（小田・真野1971・1972）。その後、吉村靖徳氏は福岡県桂川町王塚古墳の石室の系譜について検討する中で、同古墳にみられる窓状施設と上述の二重玄門構造などが矢部川流域（八女地域）・菊池川流域を中心に分布し、北部九州（遠賀川上流域の王塚古墳）まで拡散したことを指摘している（吉村2000）。この中で吉村氏は、窓状施設の設置に伴う「袖石上部架構石」をいわゆる楣石と区別しつつ、この袖石上部架構石が構造力学に基づく構築技術とは無関係に設置されている点とともに、窓状施設はその前面（羨道側）が意味をなす仕切りとしての機能性を有することを論じている。また窓状施設および二重玄門構造が、有明海沿岸地域の各地の事例においても、基本的には閉塞施設の一連の構造において構築されており、装飾的な意味合いが強いことを指摘している点は注目される。

（4）本稿の課題

以上、北部九州の古墳時代後期における横穴式石室研究を概観し、その上で本稿が対象とする乗場古墳および童男山1号墳の石室に関わる諸問題について検討を行ってきた。この中では、両古墳・石室の年代観が6世紀後半～末前後で概ね共通するものの、時間的な前後関係や両者の系譜関係を八女古墳群全体の中でどのように捉えるかが明確となっていない点が課題として挙げられる。また上述のような窓状施設や二重玄門構造のような具体的な共通の特徴が認められる一方で、石室の構築技術や築造工程などがどのように説明されるのかという観点から、以下では八女古墳群の変遷における両石室の位置づけを明らかにすることを目的として検討を行いたい。



図4 童男山1号墳石室の三次元図
(上：玄室石屋形，下：玄門部の窓状施設・二重玄門構造)

3. 資料と方法

前述のように、本稿では、八女市乗場古墳と童男山1号墳の横穴式石室を対象として築造工程の観察を行う。検討に際しては、当然ながら両石室の直接の

観察結果を第一とする。この点について、童男山1号墳は石室が自由に開放されているため問題ないが、乗場古墳については、彩色壁画を有する装飾古墳のため、現在も石室への立ち入りや観察が制限されている。筆者は、現在福岡県教育庁文化財保護課と九州歴史資料館が中心となって2022年度から3カ年にわたり行われている、「福岡県装飾古墳総合調査」の委員として委嘱されており、この調査・研究の一環として、2023年4月に防護服着用のもと、石室内に入って観察する機会を与えられた。またその際に、あわせて SfM/MVS の「Metashape」とアプリ「Scaniverse」による三次元計測を行うことを認められたため、写真撮影・計測を行った。こうした三次元計測自体は以前から行われていたが、特に2019年末のコロナ禍以降、フォトグラメトリをはじめとした三次元計測が広く普及し、横穴式石室についても計測・記録だけでなく、計測的属性・非計測的属性も含めた分析が活発に行われている（例：青木2024）。筆者も2020年以降、北部九州の横穴式石室を主な対象としてフォトグラメトリによる三次元計測と観察・分析を科学研究費により進めてきた。こうした三次元計測の有効な活用方法の一つとして、記録そのものや、実測図に表現されない、もしくはされにくい部分の数値化・計測可能性といった点以外にも、例えば装飾古墳のように立ち入りや滞在時間・条件が制限される場合でも、そうした制約に影響を受けることなく、長時間にわたる多方向からの観察や図化が可能という点が挙げられる。本稿はそうした記録・計測の結果をもとに具体的な観察を行うものである。上記の福岡県装飾古墳総合調査については、2025年3月に報告書が公開予定であり、その成果が広く有効活用されることが期待される。

また三次元計測とともに重要であるのが、現地における石材の構築方法の観察である。実測図では、特に平面図や側面図の断面図において、壁体等に入り込んだ石材の端部は必要最小限の図示に留めるのが一般的であるが、実際には壁体や天井石などにおいて、ライトで照らすことによりどこまで石材が入り込んでいるかが目視できる場合も多い。この結果を、いわば補助線として実測図に付加することにより、例えば石材の大きさ・範囲や石材の配置の順序がより明確に表現できる場合がある。以下では、報告に際しての表現とは別に、築造

工程という観点から、石室の観察結果を反映させる形で検討を行いたい。

4. 乗場古墳および童男山1号墳石室の観察

(1) 乗場古墳石室の観察

乗場古墳の横穴式石室は、前述のように全長約10mの複室構造の石室である。玄室長は3.3m、奥壁幅2.72m、高さ3.2mである。連続三角文や同心円文などの彩色壁画が描かれている（図1）。

この石室について、現地および三次元計測の結果をふまえ、石材の配置・築造工程を復元したものが図5である。破線は筆者による追記である。報告書で小田富士雄氏らが指摘しているように、玄室奥壁の高さに揃えるように目地が水平方向に通っており、この部分より下位に彩色壁画があることから、この時点で築造工程が前後に分かれること、彩色壁画はこの段階以前に描かれたことが想定される（小田・真野1972）。墳丘が未調査のため、墓壇と石室の関係が不明確であるが、小嶋篤氏が指摘するように、「八女型」では比較的浅い墓壇に石材を配置し、裏込めを行いながら上部の石材を構築したものと考えられる（小嶋2020）。その上で石材の配置を観察すると、石材の位置からみた前後関係に基づき、以下のような築造工程が復元できる。

（石室基底部の構築）

玄室奥壁の配置 ① → 両側の側壁腰石で玄室奥壁を挟む ② → 玄室袖石の配置 ③ → 前室側壁腰石の配置 ④ → 前室袖石の配置 ⑤ → 羨道部の構築 ⑥

（石室上半部の構築）

玄門の天井石の架構 (A) → 前門の天井石の架構 (B) → 玄門天井石・前門天井石の間の前室側壁上部への石材配置／羨道天井石の架構 (C) → 前室天井石の配置／玄室前壁の石材配置 (D) → 玄室天井石の架構 (E)

本石室の築造に際しては、先の小田氏の指摘にあるように、基底部の構築と

上半部の構築の両者で築造工程が大きく2段階に区分される。その上で、基本的には玄室奥壁から順番に羨道側に向かって石材が配置される。上半部は玄門・前門の天井石がそれぞれ大型石材を用いており、この両者の架構が起点となっている点が指摘できる。

この点に関連して注目されるのが、二重玄門構造と前門にみられる窓状遺構の存在、そしてそれぞれの天井石との関係である。二重玄門構造からみると、③の袖石（玄門立柱石）の前室側に薄い板状の立柱石がもう一枚重ねて配置されているが、大型の天井石は玄室側の袖石の真上に中心が来るように架構されている。玄門立柱石の直上に薄い板石があり、その上に天井石が架構されているのは、玄室奥壁の高さに合わせて全体の高さを揃えるためであり、その意味でもやや不安定な基礎の上に大型の石材が架構されていることがわかる（図7・8）。この点において、前述の吉村靖徳氏が指摘するように、二重玄門構造は玄門天井石の重量を支えることを第一の目的としたものではなく、閉塞施設に関わる装飾的な意味合いがつよいものとみることができる（吉村2000）。

その上で玄門の天井石に注目すると、前室側正面および石材下面が平滑な面を有しているのに対して、玄室の前壁側は山形ないし凸字形に突出した形態をしていることがわかる（図6～8）。ここではこれを山形天井石と呼称しておきたい。後期の横穴式石室において、玄室前壁を構成する玄門天井石あるいは楣石は、石材の平坦な面を玄室内部に向けて配置する場合が一般的であることから、本石室のように玄室側に突出したあり方は特異である。これが自然面もしくは石材の粗割面を残したものであるとすると、石材下面および前室側が平滑な面を正面としているのは、両者を対比的に配置した結果であると考えることができる。

次に窓状施設について検討する。本石室では前門袖石の上部に設けられている（図9）。玄門上部と同様に、袖石上部に薄い石材が載せられるが、ここでは前室側壁の石材が側壁とまたがる形でやや内側に持ち送るように配置され、その上に前門天井石が加工されている。窓状施設は、袖石上部の薄い石材の上に細長い石材を架構し（吉村氏のいう「袖石上部架構石」）、この上に空間を設け

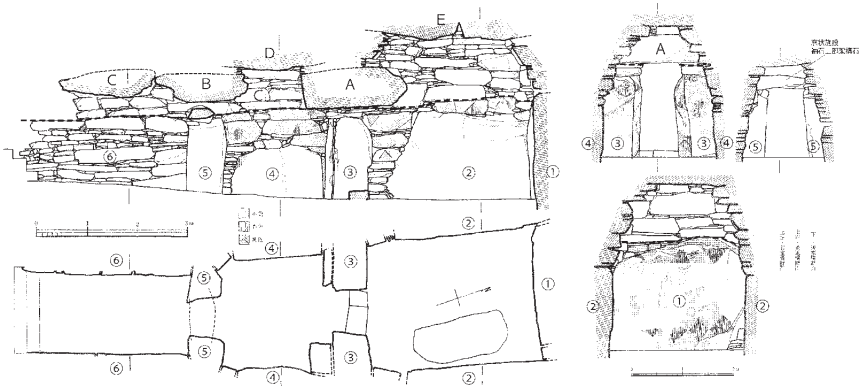


図5 乗場古墳石室の築造工程復元（縮尺任意）

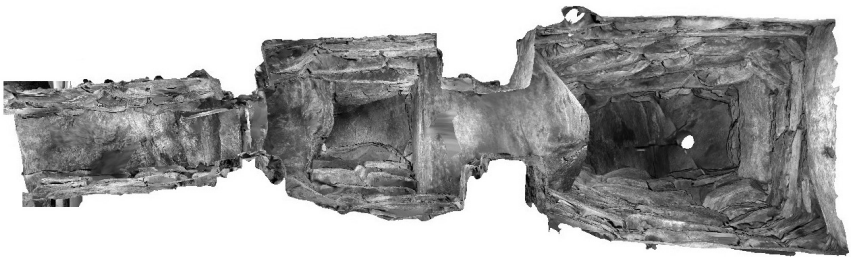


図6 乗場古墳石室の天井部

ることによって窓状施設をつくり出している（乗場古墳では、現状でこの窓状の空間部分はセメントで塞がれている）。ここでも吉村氏が指摘するように、窓状施設は前門天井石を支えることには殆ど貢献しておらず、別の意味が付与されていることが看取できる。

また前門の天井石の形態に注目すると、玄門天井石と同様に、前室側が凸字形ないし山形に突出しているのがわかる。羨道側の前面は、別の天井石と接する部分が自然面を残したような不整形な形態であり、この点は平坦面を有する玄門天井石とは異なっている。ただし、袖石上部架構石の前面とはほぼ並行する

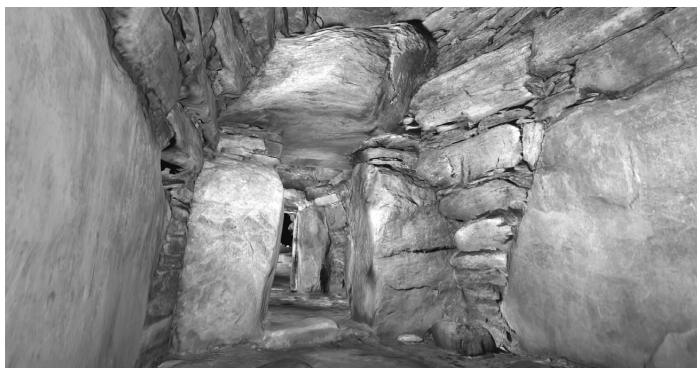


図7 乗場古墳玄門袖石・天井石周辺（玄室奥壁側から）

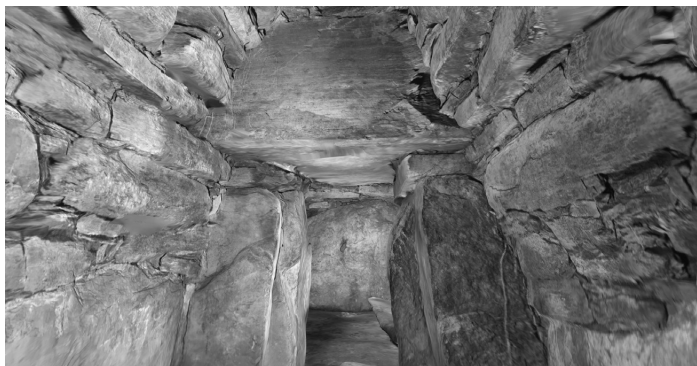


図8 乗場古墳玄門袖石・天井石周辺（前室から）



図9 乗場古墳前門袖石・窓状施設（袖石上部架構石）・天井石周辺（羨道から）

ように天井石下面側に平坦面状の段があり、この部分が正面となるように配置されている点が注意される(図5天井石B・図9)。これについては、玄室・前室それぞれの入口側で袖石上部の石材の視覚的な効果を重視したものともみることができよう。いずれにしても、前門天井石が、玄門天井石と同様、玄室側にに向けて山形に突出した部分を配置するという共通した特徴がみられる点を確認しておきたい。

(2) 童男山1号墳石室の観察

次に、童男山1号墳の石室について検討を行う。本石室は矢野一貞の『筑後将士軍談』に記録されており、早くから開口して羨道部が破壊されていたことが知られている(八女市教育委員会1971)。現在は前室の袖石・天井石の前面が露出した形になっているが、小田富士雄氏らによる調査・報告の後、1987年に行われた石室周辺の発掘調査の結果、羨道部の基底石材の一部が確認され、全長約18mと復元されている(八女市教育委員会1988:図2)。玄室長は4.3m、奥壁幅3.98m、高さ4.75mである。玄室奥壁側には刳拔式石棺(1号棺)を伴う石屋形が設置され、その前面にも刳拔式石棺(2号棺)が安置されている。玄室東壁側も発掘調査が行われた結果、多くの石棺材が出土したことからもう1基の石棺の存在が想定されており(3号棺)、いわゆるコ字形の棺配置が行われたものとみられる。石室全長18mの規模は、福津市宮地嶽古墳やみやこ町綾塚古墳などに次いで福岡県内でも最大規模の石室の1つである。また前述のように二重玄門構造および窓状施設を有する点が乗場古墳の石室と共通する(小田・真野1971・1972;吉村2000)。

本石室についても、乗場古墳の石室と同様に、現地での観察をもとに築造工程の復元を行った(図10)。実測図では1971年・1988年の報告のいずれも東壁側が図示されているが、乗場古墳の石室との比較のため、ここではMetashapeによるオルソ画像を用いて西壁側の検討を行った。その結果は以下の通りである。

（石室基底部の構築）

石棺・石屋形の設置 (⑩) → 玄室奥壁の配置 (①) → 両側の側壁腰石で玄室奥壁を挟む (②) → 玄室袖石の配置 (③) → 前室側壁腰石の配置 (④) → 前室袖石の配置 (⑤) → 羨道部の構築 (⑥)

（石室上半部の構築）

玄門の天井石の架構 (A) → 前門の天井石の架構 (B) → 前室天井石の配置／玄室前壁の石材配置 (C) → 玄室天井石の架構 (D)

本石室では彩色壁画はみられないが、乗場古墳の石室と同様に、大きく石室下半と上半で築造工程が2段階に区分できる。その区分が玄室奥壁の高さに揃える形である点も乗場古墳と共通である。石室の構築に際しては、乗場古墳と異なり刳拔式石棺および石屋形が設置されており、これらは石室の完成後に搬入・移動することは困難と考えられることから、基本的には石室の構築に先立って石棺の設置が行われたものと想定する。特に1号棺・2号棺ともに玄室の奥壁・側壁にはほぼ接する位置に配置されていることからすれば、玄室奥壁・側壁の設置は石棺・石屋形の配置の後と考えるのが妥当であろう。また石屋形は刳拔式石棺の奥壁側中央に1枚、石屋形前面側に左右1枚ずつの板石を立て、両小口側に1枚ずつ立てた大型の板石の上に屋根材を載せるといった特徴的な形状であり(図4上・図10)、この点も石屋形の構築が奥壁設置の前に行われた可能性が高いことを示している(石屋形前面の右側石材の右側にはもう1枚壁体との間に低い板石が配される)。石室の構築にあたっては、奥壁・側壁の各基底石の位置関係と石室全体の中軸線が重要と考えるが(辻田2024a)、この点で1号棺・2号棺の配置は玄室の規模を規定するものとして配置されたと考えられる。

その後は、玄室奥壁の設置に始まり、前室前門袖石の配置に至る築造工程の順序は乗場古墳の石室とはほぼ同様とみられる。ただし、二重玄門構造の立柱石と窓状施設に違いがある。玄門立柱石は石材の配置が東壁・西壁で異なる。東壁では前室側の立柱石が壁体に入り込む形で配置され、玄室側の石材はその「内

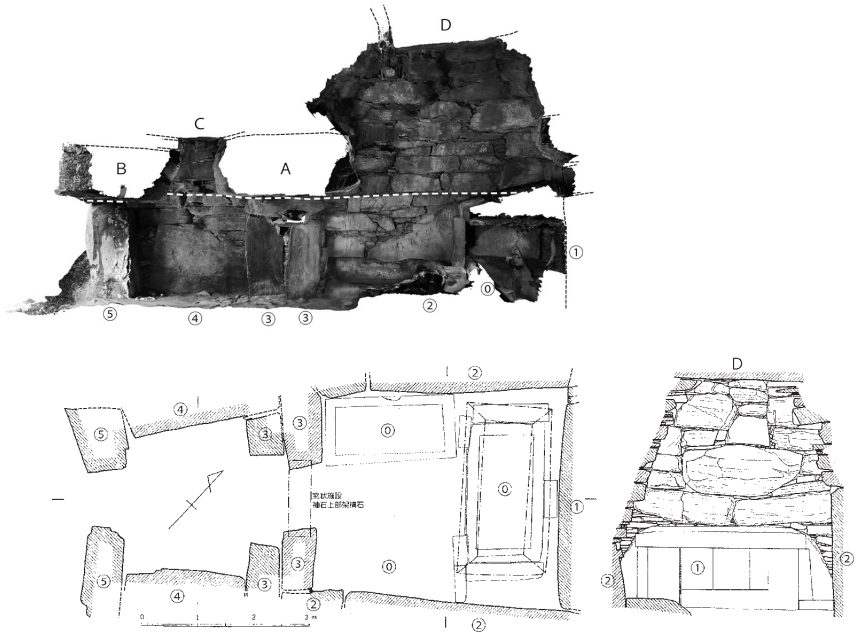


図10 童男山1号墳石室築造工程の復元（縮尺任意）



図11 童男山1号墳石室の天井部

側」に独立して配置される形となっている。西壁側は、石材配置が逆で、玄室側の袖石が壁体に入り込む形となっている。通常は後者が一般的であるとみられ、乗場古墳も同様である。なお童男山1号墳の石室実測図では1971年報告(図10)と1988年報告(図2)とでこの部分の石材配置の表現に違いがあり、前者がこの点を正確に表現していると考えため、築造工程の復元図ではこちらを使用している。また窓状施設は乗場古墳では前門上部に位置していたのに対し、童男山1号墳では玄門上部に設置されている。

石室上部の構築に際しても、乗場古墳と同様に、玄門袖石上部の天井石の架構が行われた後、前門上部への天井石の架構が行われる。前室上部の天井石架構と玄室上部の壁体構築の後、最後に玄室の大型天井石の架構が行われている。玄室上部は穹隆状天井であり、壁体構築において重箱積みが認められる点が特徴である(小田・真野1971; 小嶋2020・2024a・b)。

ここで乗場古墳と同様に、玄門・前門の天井石の形態と窓状施設、二重玄門構造について検討したい。まず玄門・前門の天井石は、乗場古墳でみられたものと同様の山形ないし凸字形の石材であり、いずれも羨道側・入口側が平坦面となるように配置されている点も共通していることが指摘できる(図11~13)。この点は石材の形態も含めてこれまで殆ど注意されることがない特徴であり、あらためて両石室の共通点として注目される。また現在古墳の前面に露出している前門天井石の平坦面(図14)は、石材下面に対してほぼ垂直であり、こうした形状の石材の利用が志向されていたものとみられる。

窓状施設は、上述のように本石室では玄門側に設置されているが、二重玄門構造を有している点でいえば玄室側の袖石の上部に石材が架構されている。現地で観察すると、この袖石上部架構石は、前室側正面の平坦面と石材の下面に赤色顔料が塗布されていることがわかる。また玄門の天井石は両側の袖石上部に置かれた大型の板石の上に架構されているが、それらの石材との接地面の幅が非常に狭く(図12)、当該天井石が大型石材である点からすれば、この位置への天井石の架構は相当に困難な作業であったことが想定される。またこの点で、二重玄門構造の2本の立柱石の奥行きが同等であり、その両者の上に均等に位

置するように玄門天井石が架構されていることは、2本のうち前室側の立柱石が乗場古墳と比べてより天井石を支える機能を有していたとみることは可能である(図13)。乗場古墳の場合は前室側の石材が薄い立柱石であり、童男山1号墳ではいわば前室側の石材が大型化しているといえる。他方で、袖石上部架構石および窓状施設は玄門天井石の架構からはほぼ完全に独立しており、赤色顔料の塗布とあわせて、この石材の象徴的な意味合いのつよさをあらためて確認することができよう。



図12 童男山1号墳の玄門袖石・天井石周辺(玄室奥壁側から)



図13 童男山1号墳の玄門部・袖石上部架構石・天井石を下から見上げる(右が玄室側)

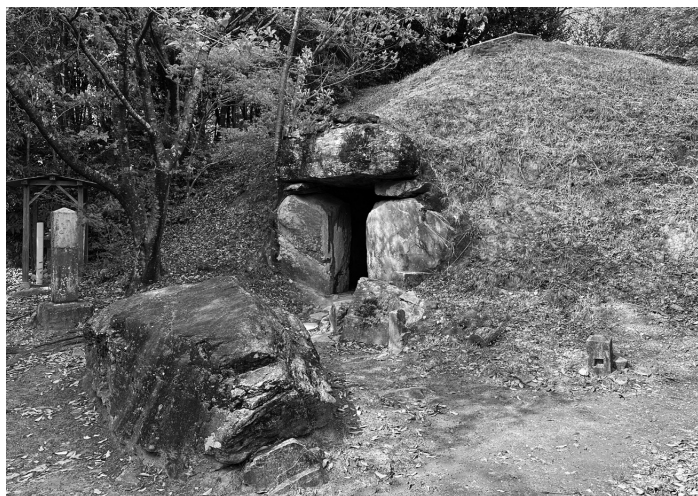


図14 童男山1号墳の前室袖石・天井石前面

(3) 小結：両石室の築造工程の比較

以上、乗場古墳と童男山1号墳の横穴式石室について、築造工程の復元と観察を行ってきた。その結果、この2つの石室については、従来指摘されてきた二重玄門構造や窓状施設の存在のみならず、築造工程や玄門・前門の天井石の形態などにおいても多くの共通性がみられることが判明した。このことは、両石室の時間的前後関係や技術系譜、また八女古墳群全体の中での位置づけなどを考える上でも重要な視点を提供するものと考ええる。以下、これらの問題について具体的に検討したい。

5. 考察

(1) 乗場古墳・童男山1号墳石室の造営年代と築造系譜について

ここではまず、両石室の築造の前後関係や年代観について検討する。研究史でも触れたように、小田富士雄氏らが乗場古墳を6世紀中頃から後半、童男山1号墳は6世紀末頃と位置づけている（小田・真野1971・1972）。その後もいく

つかの見解があることはすでにみた通りであるが、結論から先に述べるならば、筆者も大枠としてこの小田氏や大塚恵治氏らが提示した年代観に近い理解をもっている。筆者は、小田氏が指摘している煉瓦積みから重箱積みへといった点に加え、先に検討した両石室の築造工程や技術の共通性という観点から、特に玄門・前門の天井石や二重玄門構造の前室側立柱石がより大型化・洗練される方向での変遷とみた場合、「乗場古墳→童男山1号墳」という変遷が妥当と考える。この場合、童男山1号墳の石室は、乗場古墳の石室のプランを玄室長で約1.3倍、全長で約1.8倍に拡張・大型化したものである可能性が想定される。玄室の高さが高くなっている点についても、こうした規模の大型化に伴い、菊池川流域以南に由来する穹隆状天井を導入した結果と考えることができる。

その上で具体的な年代について考えると、乗場古墳は小田氏が出土須恵器について「Ⅲ A 期」で王塚古墳の後出様式と位置づけているが、MT85～TK43型式前後とみられる。童男山1号墳はそれにやや後出するとみてTK43～TK209型式前後と考えておきたい。このようにみた場合に、岩戸山古墳周辺では、乗場古墳以外にも鶴見山古墳や善蔵塚古墳などの前方後円墳があり、また単独円墳も複数存在することから、それらとの関係をどのように説明するか、特に乗場古墳を八女古墳群の中でも最後の前方後円墳とみてよいかという点が問題となる。以下この問題について検討したい。

(2) 窓状施設と二重玄門構造について

両古墳の八女古墳群の位置づけを考える上で、大きく2つの点に注目したい。1つは、先に検討した窓状施設および二重玄門構造であり、もう1つは、八女古墳群における前方後円墳の築造停止との関係である。

前者の特徴については、吉村靖徳氏が指摘するように矢部川・菊池川流域を中心に分布し、大型石室を中心に採用されている（吉村2000）。窓状施設は、両古墳の他では、福岡県桂川町王塚古墳や熊本県山鹿市馬塚古墳などの事例が知られるが、非常に限定的である点が注意される。また二重玄門構造を有する古墳として、他に福岡県大牟田市萩ノ尾古墳、熊本県玉名市永安寺西古墳、岡山

鹿市臼塚古墳、同氷川町大野窟古墳・中ノ城古墳などがある。これらは6世紀後半前後の各地における在地の最上位墓である。この中で、窓状施設と二重玄門構造の両者がともに同一古墳に採用されている事例は乗場古墳・童男山1号墳などにほぼ限定されている。窓状施設に関しては具体的な機能が不明であるものの、吉村氏も指摘するように、閉塞施設の中に組み込まれたものであり、二重玄門構造とあわせて装飾的な意味合いがつよいものと考えることができる。こうした点と上述のような稀少性・限定性という点からみた場合、この両者は階層上位の石室に付加的に設置された施設である可能性が高い。

また童男山1号墳の玄室には3基の石棺の存在が想定され、かつ奥壁前面に設置された1号棺には大型の石屋形が伴っている。1号棺については石屋形に刳拔式石棺が伴っているとみた方がよい事例でもあるが、いわゆる「開かれた棺」である石屋形の内部に屍床ではなく刳拔式石棺が用いられた例は殆ど知られておらず、この玄室の格付けの高さを物語っている。なお玄室長約4.3mという規模は、5世紀代以来の北部九州における最大の規格とみられる（辻田2023）。乗場古墳に関しては盗掘により玄室内部の元来の構造が不明であるが、玄室内に残された板石などから、石屋形などが用いられていた可能性も想定される。石屋形の有無はともかくとしても、先の観察から、童男山1号墳の石室は乗場古墳の石室の築造工程や技術を継承しつつ、その規模を大型化・拡大したものと想定される点からすれば、童男山1号墳の石室は、復元径約48mというその大規模な墳丘とともに、現在知られている八女古墳群の同時期に築造された古墳の中では最も上位に位置づけられていた古墳の1つとみるのが妥当である。それに先行する乗場古墳の石室についても、彩色壁画が施されている点も含めて同様の理解が可能である。なお筆者は乗場古墳の墳長について、本稿や別稿（辻田2023）などで「約90m」として記述しているが、報告ではこれまで「約70m」と想定されている。これについて筆者は、周辺が大幅に削平されている現地の墳丘および周辺地形を測量図を照らして観察した結果、また従来周溝・周堤を伴い周堤上には円筒埴輪列が並んでいたという記録（八女市教育委員会1972）などから、少なくとも墳長90m（以上）とみるのが妥当であると考え、そ

のように説明している点を付記しておきたい。北部九州では、後期後葉の単独墳において彩色壁画を採用した石室は各地の最上位墓にほぼ限定されており（辻田2024b・2025）、墳丘規模においても鶴見山古墳や善蔵塚古墳と同規模以上とみられることから、最後の前方後円墳（群）の1つに相応しい古墳と考えられる。

以上から、乗場古墳と童男山1号墳の石室は、いずれも八女古墳群においては、それぞれの築造時期における在地的秩序の最上位に位置づけられる存在と考えることができよう。

（3）石室からみた八女古墳群における乗場古墳・童男山1号墳の位置づけ

次に問題となるのが、童男山1号墳が乗場古墳に直接後続する在地最上位墓かという点である。これは上述のように、最後の前方後円墳が乗場古墳かどうか、八女古墳群における前方後円墳の築造停止がどのように行われたかという問題と言い換えることもできる。具体的に問題となるのは、鶴見山古墳・善蔵塚古墳と乗場古墳との関係、また周辺における単独の大型円墳と童男山1号墳との関係である。

まず前方後円墳であるが、前述の柳沢一男氏（2014）は墳丘形態にもとづき大きく2系列（岩戸山→乗場／善蔵塚→鶴見山）と捉えるのに対し、大塚恵治氏は乗場・善蔵塚・鶴見山を「6世紀中頃」にほぼ同時期に並行して築造されたと考えている（図3）。このうち武装石人が出土した鶴見山古墳（全長約87.5m）は、石室形態からみて乗場古墳より年代的に先行する可能性が高い。問題となるのは善蔵塚古墳（全長約90m）であるが、この古墳については未調査のため不明な点も多く、位置づけが困難である。小嶋篤氏は出土した埴輪などから善蔵塚古墳を鶴見山古墳と同系列（「Ⅳ群系」）に位置づけ、鶴見山が先行するとみる一方、岩戸山－乗場を「Ⅴ群系」として区分している（小嶋2024a）。2系列に区分する点は前述の柳沢氏と共通するが、善蔵塚古墳の年代的な位置づけに関しては異なっている。

このように善蔵塚古墳については石室が不明であることから、埴輪などか

らみた場合に鶴見山古墳や乗場古墳ともそれほど時期差なく築造された、という理解に留め、詳細な年代観については今後の課題としておきたい。後期中葉～後葉にかけて、大型前方後円墳が複数築造された事例としては、「火(肥)君」の奥津城と目されている、有明海沿岸南部の八代地域における熊本県氷川町野津古墳群に近い様相といえよう。

またこれらの前方後円墳とともに、一念寺古墳・茶臼塚古墳・丸山塚古墳など、後期に築造された径30m前後の単独円墳の存在が知られている(八女市教育委員会2015;九州歴史資料館編2024)。一念寺古墳については栄山江流域に由来するとみられる平底壺形埴輪の年代観から6世紀中葉以前と想定されている(小嶋2024a)。茶臼塚古墳・丸山塚古墳についても、埴輪や土器類から、また後者は石室形態などからも、概ね乗場古墳と同時期あるいはその前後に築造されたものと想定されるが、石室規模はいずれも童男山1号墳より小さい点が注意される。

このようにみた場合に、先の観察の結果から、童男山1号墳を乗場古墳に直接的に技術系譜が連なる形で後続して築造されたと考えるならば、前述の大塚恵治氏が指摘するように、八女古墳群における大型前方後円墳(群)の築造停止と前後する形で新たに築かれた大型円墳とする理解が可能であろう。その場合、童男山1号墳は、現状で乗場古墳などの最後の大型前方後円墳(群)と岩戸山4号墳(下茶屋古墳)との間に位置づけられることになる。あわせて、童男山古墳群の中にみられる他の大型円墳が岩戸山4号墳に先行して築造された可能性も想定される。本稿では検討できなかったが、現在観察できるだけでも、例えば童男山1号墳より後出するとみられる同3号墳では石屋形が設置されており、またほぼ同時期に相前後して築造されたとみられる同22号墳・同25号墳のうち、25号墳では前室の袖石が二重で(「二重前門構造」)、さらに石棚を伴うという特徴が認められる(八女市教育委員会1985巻末の表1と筆者自身の観察・三次元計測の結果による)。このような点からも、童男山古墳群は小規模石室の円墳を中心とした群集墳とは異なり、地域の上位層が埋葬された大型円墳が集中して築造された墓域とみられ、終末期群集墳のもう1つの類型と理解するこ

とができよう。八女古墳群の構成からみた地域社会の統合のあり方などについては今後の課題としておきたい。

6. 結語：課題と展望

本稿では、三次元計測による観察結果にもとづきながら、乗場古墳および童男山1号墳の横穴式石室の築造工程について検討を行ってきた。その結果、両者の築造工程と天井石の架構技術、玄門・前門天井石の形態や配置などにおいて多くの共通性が認められ、乗場古墳の石室を大型化し、かつ他の要素を複合したものが童男山1号墳の石室であると想定された。その上で、両石室が二重玄門構造や窓状施設の存在、また使用石材や規模といった点からみても、八女古墳群における同時期の最上位の石室と位置づけられることを論じた。

こうした問題を考えていく上では、有明海沿岸地域や筑後川中流域などの周辺地域との関係、また他地域の大型横穴式石室の築造工程との共通性と差異の検討などが重要な課題となる。本稿では殆ど触れることができなかったが、結晶片岩を主体とした石材利用と他の石材との併用がどのように行われているかという点についても大きな課題である。

またこれらの問題への検討を通じて、北部九州における古墳時代終末期の大型横穴式石室の終焉過程といった別の課題についてのアプローチも可能となろう。そのような問題を検討する上でも、本稿でみたような三次元計測にもとづく観察が有効であることを再度強調して搁筆したい。

【謝辞】

本稿は、2024年12月15日に開催された九州史学会考古学部会にて発表した内容にもとづいている。本稿をなすにあたり、下記の方々には多くの御協力・御教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

伊崎俊秋、大塚恵治、大庭孝夫、河野一隆、岸本圭、小嶋篤、重藤輝行、下原幸裕、進村真之、武末純一、田尻義了、檀佳克、溝口孝司、吉田東明、吉村靖徳（五十音順・敬称略）

本稿は、科学研究費・基盤研究（C）「横穴式石室の三次元計測による6・7世紀の地域支配の実態解明：北部九州を中心に」（2020～2022年度・課題番号：20K01076）および同「横穴

式石室の三次元計測による古代地方行政単位成立前史の考古学的研究：九州を中心に」（2023～2026年度・課題番号：23K00933）の成果によるものです。

【参考文献】

- 青木弘 2024 『横穴式石室の築造技術と造墓集団』早稲田大学出版部
- 大塚恵治・岸本圭 2009 「岩戸山古墳と八女古墳群」アクロス福岡文化誌編集委員会編『古代の福岡』海鳥社
- 小田富士雄 1968 「横穴式石室古墳における複室構造の形成」『史淵』100
- 小田富士雄・真野和夫 1971 「童男山古墳」『管の谷窯跡群』八女市教育委員会
- 小田富士雄・真野和夫 1972 「乗場古墳の調査」『立山山窯跡群』八女市教育委員会
- 九州歴史資料館編 2024 『筑紫君一族史』九州歴史資料館
- 藏富士寛 1997 「石屋形考」『先史学・考古学論究2』龍田考古会
- 藏富士寛 2009 「九州地域の横穴式石室」杉井健編『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店
- 藏富士寛 2020 「複室構造横穴式石室——九州地域の横穴式石室に対する構造的理解に向けて——」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社
- 小嶋篤 2020 「筑後の横穴式石室墳」『福岡大学考古学研究論集3』武末純一先生退職記念事業会
- 小嶋篤 2023 「九州の横穴式石室墳」『令和5年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会
- 小嶋篤 2024a 「八女古墳群の研究」九州古文化研究会第201回例会資料
- 小嶋篤 2024b 「総論 筑紫君一族史」『筑紫君一族史』九州歴史資料館
- 下原幸裕 2006 『西日本の終末期古墳』中国書店
- 下原幸裕 2020 「北部九州における横穴式石室の終焉」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社
- 重藤輝行 1999 「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会
- 重藤輝行 2020 「九州における横穴式石室の展開——編年・地域性・階層性の概観——」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社
- 杉井健編 2009 『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店
- 田村悟 1999 「北部九州における大型横穴式石室の変遷」『考古学に学ぶ——遺構と遺物——』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 田村悟 2009 「遠賀川流域の横穴式石室」『地域の考古学』佐田茂先生論文集刊行会
- 辻田淳一郎 2023 「前方後円墳の築造停止とその背景——北部九州を中心に——」『史淵』160
- 辻田淳一郎 2024a 「古墳時代後期における横穴式石室の基準尺度に関する予備的検討」宮本一夫先生退職記念事業会編『東アジア考古学の新たな地平』中国書店
- 辻田淳一郎 2024b 「北部九州における装飾古墳の築造とその背景」『九州前方後円墳研究会

論集』九州前方後円墳研究会

辻田淳一郎 2025 「継体期前後の北部九州と岩戸山古墳」若狭徹・埼玉県立さきたま史跡の博物館編『継体大王と地方豪族』吉川弘文館

福岡県教育委員会編 2025 『福岡県の装飾古墳』福岡県文化財調査報告書第288集

柳沢一男 1975 「北部九州における初期横穴式石室の展開——平面図形と尺度について——」『九州考古学の諸問題』東出版

柳沢一男 1990 「横穴式石室からみた地域間動向——近畿と九州——」『横穴式石室を考える』帝塚山考古学研究所

柳沢一男 2003 「複室構造横穴式石室の形成過程」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会

柳沢一男 2014 『筑紫君磐井と「磐井の乱」岩戸山古墳』新泉社

山崎信二 1985 [2003] 「横穴式石室構造の地域別比較研究——中・四国編——」『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社に所収

八女市教育委員会 1971 『管の谷窯跡群』八女市教育委員会

八女市教育委員会 1972 『立山山窯跡群』八女市教育委員会

八女市教育委員会 1985 『童男山11・12号古墳』八女市文化財調査報告書第13集

八女市教育委員会 1988 『童男山古墳』八女市文化財調査報告書第16集

八女市教育委員会 2015 『八女市岩戸山歴史文化交流館 常設展示図録』八女市教育委員会

八女市教育委員会 2024 『釘崎2号墳・鶴見山古墳4：八女市豊福所在古墳の確認調査報告書』八女市文化財調査報告書第141集

吉村靖徳 2000 「筑前王塚古墳の石室構造に関する一考察」『九州旧石器』4

【挿図出典】

図1・5：八女市教育委員会（1972）を改変，図2：八女市教育委員会（1988）を改変，図3：柳沢（2014）を改変，図4：八女市教育委員会（2015）を改変，図6～9・11～13：筆者撮影データをもとに筆者作成，図10：八女市教育委員会（1971）を改変，側壁画像は筆者作成，図14：筆者撮影